

島根県におけるインターフェロン γ 遊離試験 (QFT) 結果 (2015 年度)

林 芙海・川上優太・川瀬 遵・村上佳子・角森ヨシエ・黒崎守人

1. はじめに

従来、結核感染の有無についての判定方法としてツベルクリン反応 (ツ反) が実施されてきたが、ツ反は感度が高い反面、BCG 接種歴や結核菌以外の抗酸菌などの影響を受ける。これに対して、結核菌特異抗原で血液を刺激することにより産生されるインターフェロン γ 遊離試験 (以下 QFT) は BCG 接種歴や結核菌以外のほとんどの抗酸菌の影響を受けない。

2005 年に体外診断用キットとしてクオンティフェロン TB-2G が販売開始されて以来、同試験は急速に普及し、接触者健診になくてはならない検査法となっている。

更に、2009 年には、より感度の高い第三世代であるクオンティフェロン TB ゴールドの販売が開始され、現在当所ではこれを用いている。

当所において、QFT の検査依頼数は 2012 年度まで年々増加していたが、2013 年度は結核患者数の減少や試薬のリコールのため一時期販売停止となっていたことから検査件数は減少したため、741 件にとどまった。2014 年度は 764 件、2015 年度は 898 件の検査を実施し、ここ 2 年間は再び増加傾向にある。(図 1)

検体数

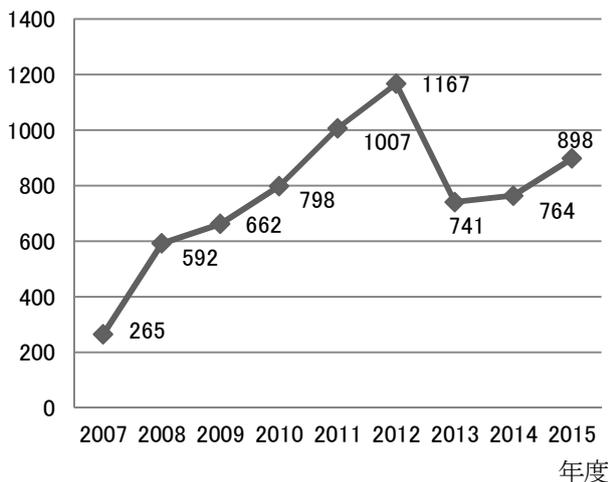


図 1 保健環境科学研究所での QFT 実施数

2015 年度の保健所別依頼数の内訳は、約半数の 433 件が松江保健所からの依頼で最も多く、次いで出雲保健所、益田保健所となっている。(図 2)

保健所の積極的疫学調査の結果と合わせ、QFT 検査の陽性率について分析したので、報告する。

件数

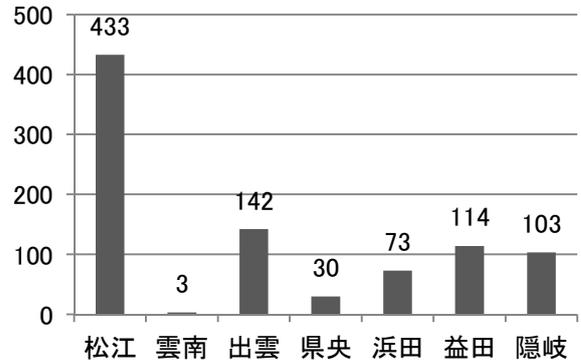


図 2 保健所別依頼数 (2015 年度)

2. 材料と方法

保健所による積極的疫学調査の結果、QFT 検査依頼があった 708 件 (接触直後の検査を除く) の検査結果について、積極的疫学調査の情報と比較した。

3. 結果

2015 年度は、708 件 (接触直後の検査を除く) の QFT 検査を実施した。2014 年度と比較し、陽性、判定保留が若干減少し陰性が増加した。(図 3)

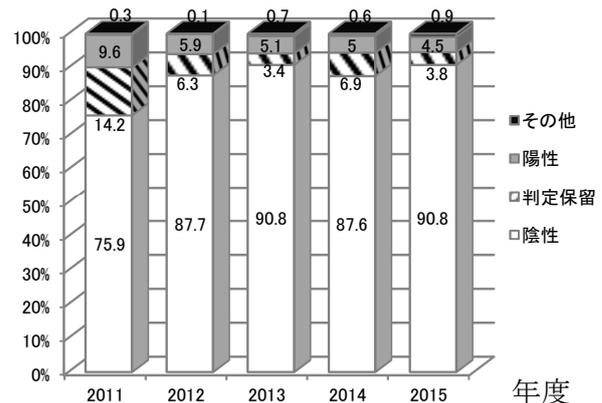


図 3 年度別 QFT 陽性率 (2 回実施の場合、接触直後を除く)

初発患者との関係別では、同居家族、別居家族、友人・同僚等、比較的患者との接触時間が長いと考えられる集団において、QFT 陽性率が高かった。(図 4)

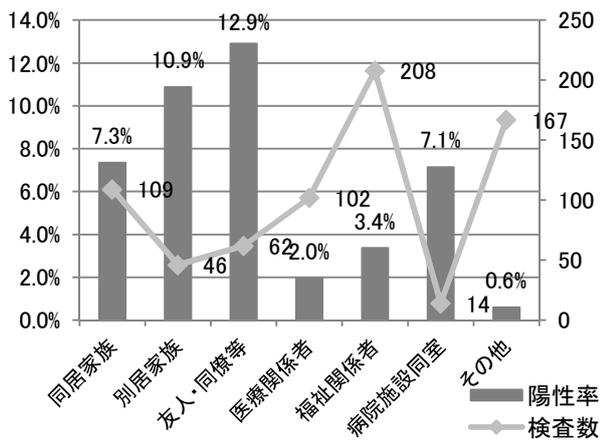


図4 初発患者との関係区分別 QFT 陽性率
(2回実施の場合、接触直後を除く。)

4 考察

2015年度は、島根県における結核の新規登録患者数

は少なく、集団感染事例も発生しなかった。しかし、QFT 検査数は前年度よりも多かった。

近年、島根県の新規結核罹患率は低下傾向にあるが、比較的活動範囲の広い人が結核を発病すると、接触者健診の対象者が増えるため、必ずしも新規登録患者数と QFT 検査数が比例関係にあるとは限らない。

QFT 検査を用いることにより、既往 BCG 接種の影響を受けずに結核感染を効率よく診断できるのみならず、結果が陰性であることが確認できればその時点で接触者健診を終了できる¹⁾。一方、QFT 検査だけでは過去の感染か最近の感染か判断できないケースが多いため、患者との接触内容、過去の結核患者との接触歴など考慮して総合的に判断する必要がある。

1) 木村ひろみ、他：結核接触者健診における QFT 検査の高齢者に対する有用性の検討